

ベルリン自由大学への留学を終えて

中野 瑛美

概要

私は2021年10月から2022年の7月まで、全学交換留学によりベルリン自由大学歴史学部在籍した。それにかかる渡航費及び生活費を、DESKより奨学助成金の形で援助いただいた。本報告書では、この10ヶ月間の留学をどう過ごしたかについて、当初の目的に照らしながら報告する。

留学の目的

この長期留学において、私が目的としていたことは3つある。まず1つは、ドイツ語力を向上させることだ。卒業論文の執筆などを通じてドイツ語力を高めていたものの、実際のコミュニケーションの場で生かせるほどにはなっていなかったため、現地で生活をしながらドイツ語力を向上させたいと考えていた。こうした日常的な会話に加え、修士論文執筆の助けになるような、専門的なドイツ語力の涵養も目的だった。2つ目は修士論文執筆のための準備だ。渡航時点では大きなテーマを決めていただけだったが、滞在中にも文献を読むなどしてよりテーマを深掘りし、研究で依拠する一次史料を手にすることが大きな目的だった。そして3つ目の目標は、実際にドイツに滞在してそこに暮らす人たちと交流をすることで、異なる価値観と触れ合い何か新しい気づきを得るといったものだった。私は外国人の友人などが多いわけではなく、ましてや10ヶ月という長期間にわたって海外で暮らすことは初めてだったため、日本を離れて異文化に触れる経験というものの想像がついていなかった。だからこそ、積極的に現地社会に働きかけることで、自分の持っていた狭い世界に新しい価値観を取り入れたいと考えていた。

そもそもベルリン自由大学を留学先に選んだのは、ベルリンという土地が自分の研究にふさわしい場所で、異文化交流をするにも最適だと考えたからだ。戦中及び戦後間もない時期のドイツの歴史を専門とする私にとって、東西の分断とその統一を中心地として経験したベルリンは、生の歴史的遺構が多く残る貴重な場だった。さらに、専門としているユダヤ人の歴史についても、充実した博物館があるなど環境としては良いものだと考えた。さらに、ベルリンには世界中からさまざまな国籍の人が集まっており、多文化が融合する街である

ことも、多様な人々に出会って見たかった私には絶好の場所であった。

留学の成果

留学期間中は通常の授業に加え、修論のための文書館の訪問（ハンブルク）を行ったり、日本学科で学ぶ学生とタンデムの交流をしたり、大学付属のオーケストラに所属してコンサートを行ったりしていた。前述した目的の順に、これらの経験がどう目的の達成につながったかを記していく。

ドイツ語力の向上という 1 つ目の目的は、主に授業参加とタンデムの交流を通じて達成できたと感じている。タンデムの交流では、日本学科の学生 3 名ほどと毎週会い、その週にあったことをお互いに話したり互いの授業の不明点を教え合ったりしながら言語交換を行っていた。毎週必ずドイツ語を長時間話す機会があったことは大きく、タンデムで話したいことなどを常日頃から考えるようになったため、日常で使えるフレーズなども増えたと感じている。

授業に関しては、複数の授業を経験したが、中でも印象に残っているのは「ベルリンのユダヤ人」というテーマで開講されたゼミだ。この授業は啓蒙の時代から現在に至るまで、ベルリンのユダヤ人たちがたどってきた歴史を振り返るもので、毎週 50 ページ近いドイツ語文献の予習が必要とされた。私の専門は戦中・戦後のため、特に授業前半は専門外の文献を読まなければならない、非常に大変だった。しかし毎週この予習をこなしたことでドイツ語の専門書を読む能力は今まで以上に上がったと感じている。また授業中もディスカッションの時間が多く取られたのだが、最初はなかなか発言できなかったものの、授業に慣れると積極的に参加できるようになり、ドイツ語での議論の練習が多くできたのも良い経験だ。この予習と授業参加に加え、プレゼンと最終レポートの提出があったため、単位を獲得するのはこれまで東大で経験したいずれの授業よりも大変だった。しかしそれ相応の成果として、専門的な授業についていくだけのドイツ語力と専門知識をつけることはできたと感じている。

2 つ目の修論の準備に関しては、ハンブルクの文書館訪問で主に達成することができた。滞在中に文献購読を通じてテーマを深掘りしたことで方向性が明確になり、戦後にユダヤ系混血児らの権利を保護した団体 (Notgemeinschaft der durch die Nürnberger Gesetze Betroffenen) の史料を得る必要があることがわかった。この団体の史料ほぼ全てを所持していたのが、ハンブルクの現代史研究所 (FZH) であり、この研究所を 2 回訪問して必要史料を得ることができた。史料が想定よりも膨大にあったため 1 回の訪問ではならず 2 回訪問す

ることになったのだが、それに伴う費用を DESK からいただいていた奨学金の援助などで賄うことができたのは大変助かった。こうした文書館の訪問に加え、留学先のベルリン自由大学歴史学部の Arnd Bauerkämper 教授にも話を聞いていただいたり、大量にある図書館の文献を入手したりと、留学生の身分を有効に活用しながら修論準備を進められたと感じている。

留学の目的の3つ目として掲げていた異文化交流は、生活そのものに加え、留学中に所属していたオーケストラの活動を通じて達成することができた。ベルリン自由大学には、ベルリン工科大学と協力して運営されている Collegium Musicum という音楽団体があり、この団体の中に大小2つのオーケストラが存在している。私は小学生の時からずっと何かしらのオーケストラに所属してヴァイオリンを弾いてきたこともあり、このベルリンのオーケストラにも参加することにした。冬学期はKSOという小規模なオーケストラに、夏学期はKSOに加えSOという大規模オーケストラにも所属した。

このオーケストラには留学生も含めた学生及び社会人が多く参加しており、国籍も実にさまざまだが、練習などは全てドイツ語で行われる。そのためドイツ語の良い練習にもなったのだが、何よりも、一度に多くの外国人と触れ合う機会は唯一無二のものだった。普段の練習だけでなく、練習後の飲み会や週末の合宿などにも参加することで多くの友人ができ、たわいもない会話を通じて自分の常識を覆されていく感覚がとても新鮮で刺激的だった。夏学期にはKSOのコンサートミストレスを務めさせてもらうことになり、そのあまりの重荷に挫けそうにもなったが、たくさん周囲に支えてもらいながら一生記憶に残る経験をすることができた。ここで出会った友人たちとは、帰国後も繋がりは途絶えておらず、今後も交流を続けたいと思っている。

また、ドイツという異国で10ヶ月過ごしたことで、予想外の気づきを得ることができた。私は「外国人」という少数派として10ヶ月過ごす覚悟を持って渡航し、実際留学中も外国人として暮らす不安や不便を多く感じたが、これはある程度予想できていたことでもあった。それ以上に強烈な印象として残っているのは、「在外邦人」という少数派としての経験である。それは2021年11月29日、海外でのオミクロン株流行を受け、日本政府が帰国便の新規予約を一斉に停止すると発表した時のことだ。このニュースは、在外邦人として過ごしていた私にはつまり、自分や親族に何があっても、年内には日本に帰ることはできないということを意味した。ただでさえドイツ国内では新型コロナウイルスの感染が爆発的に拡大し、私自身は3回目のワクチン接種を受けられていない状態だったため、この日本政府の

方針はかなり自分の不安を煽るものだった。しかし同時に、留学に来たのは自己責任だという思いもあり、この政府方針へ逆らってはいけないのだとも思っていた。だが周知の通り、この政府方針はわずか3日後の12月2日には覆されることとなる。結局この政府方針は、在外邦人が帰国する権利を侵害するもので、当事者たる在外邦人だった私には異論を唱える権利があったわけだが、当時の私はその考えに至ることができなかった。この経験を通じて感じたのは、少数派として生きていると、自分の持っているはずの権利を主張することはおろか、認識することさえも時として難しくなるということだ。ナチ・ドイツのユダヤ人という少数派に強い興味を抱いて研究し、将来的にも何かしら少数派の保護に寄与するような仕事をしたいと考えている私にとって、当事者として得たこの経験は何にも替え難い強烈な記憶として残っている。こうした経験ができたのも、長期間の留学のおかげだと感じている。

最後に、コロナ禍で困難が多い中こうした貴重な経験ができたのは、留学に理解を示し尽力してくださった先生方や職員の方、家族のおかげです。携わってくださった全ての方に感謝申し上げます。

(2022年11月15日受理、2022年11月25日公開)